

地域にエコの明かりを灯す ペットボトルイルミネーション

東近江市石塔町では毎年12月初旬から翌年の正月まで、ペットボトルで作られたイルミネーションが点灯される。いまや冬の風物詩となつたイベントにこめられた住民の思い、取り組みの様子をレポートする。

地域の絆を深めるための 住民の手づくりイベント

年の暮れも押し迫った師走の夜、東近江市石塔町の竹の鼻文化センター横の広場に温かな明かりが灯された。周囲は人家の灯がぱつりぱつりと見えるばかりの漆黒の闇。そんな中で、ペットボトルを再利用して作られた大小14基のオブジェが内側から発光するようにやわらかな光を放つて、冬の夜を照らしている。使われているペットボトルの総数は1万3千本にものぼるという。

今では他府県から多くの人が訪れるほどに知名度が上がり、東近江市の冬の人気イベントとなつた「石塔町ペットボトルイルミネーション」がスタートしたのは2003年。「地域の子どもは地域で見守ろう」と結成された「阿育の子育成会」の活動の一環として始まり、毎年オブジェを少しづつ増やしながら10年を超えた。昨年12月に11回目を迎えた。

「お父さん、お母さん以外の地域の人と子どもの交流、つまり地域に暮らす三世代の交流が一番の目的なので、みんなが楽しめることが基本です。そこに入ることを取り入れました」と話すのは、イベントの中心メンバーである中野雅夫さん。

昔のように、地区に住んでいる大人も子どももお互いに顔見知りになれるような場をつくることを目指しての活動なので、行政や企業などからの支援をいっぱい受けず、デザインから制作・設置・運営まですべて地区の住民が行つている。文字通り、手づくりのイベントなのだ。

阿育の子育成会では毎年夏、石塔町にある石塔寺の万燈会にあわせて、地区の子どもたちが手づくりした行灯に明かりを灯す「石塔フェスティバル」を行つて楽しめる明かりのイベントをしたい、それもできれば万燈会のように一日限りではなく、ある程度の期間続くようなものと考えていたとき、中野さんの目にとまつたのが、神戸の商業施設の片隅に置かれていた手づくりらしき光る小さなオブジェだった。よく見るとペットボトルと針金で形づくりられている。「これなら自分たちも作れそうだし、身近にあるペットボトルを再利用すれば、ものを大切にすることも子どもたちに伝えられる」。早速、地区で有志を募つてクリスマスのイルミネーション作りにとりかかつた。

業してもらいました】
子どもたちは針金を通す穴をあけたり、仕上げや設置を手伝い、大人は自分たちで描いた設計図に沿って針金でペットボトルと電灯を固定していく。作り方がわからず試行錯誤しながら、3か月かけて高さ4メートルのツリー第1号が完成！ 支柱にペットボトル400個をつなぎ、中に電灯を入れた透明の光るツリーだ。

「子どもたちは作っている間、どんなものができるのかピンとこなかつたようです。初めて暗闇で光が

ペットボトルイルミネーション作りは、まず地区の資源ゴミの中からペットボトルだけを集めて洗浄することから始まった。石塔町でゴミとして出されるペットボトルだけで十分な数が調達できた。しかし、ひとつくちにペットボトルといっても大きさも色もまちまち。キャップとラベルをはずして洗つて分類するのは想像以上に手間がかかった。そこで、子どもたちに多量のペットボトルを一つ一つ洗つてもらうことにして。

灯つたとき、「うわー」と歓声が上
がりました

みんなで楽しみながら作る！それが一番大切なこと



1/3ヶ月かけて苦心の末に完成させた記念すべき第1号のツリー。2/害獣除けフェンスの残りを活用した最新作「メリーゴーランド」。放射線状に建てたネットにボトルとLED電灯を波形に取り付けている。3/子どもたちの一番人気!長さ18mの光る「三角トンネル」。4/子どもたちの制作風景。絵を描いたペットボトルでイルミネーションを飾る。5/「阿育の子育成会」の中野雅夫さん。頭の中には、すでに来季の構想も?次はどんな新作が登場するのか、今から楽しみだ。



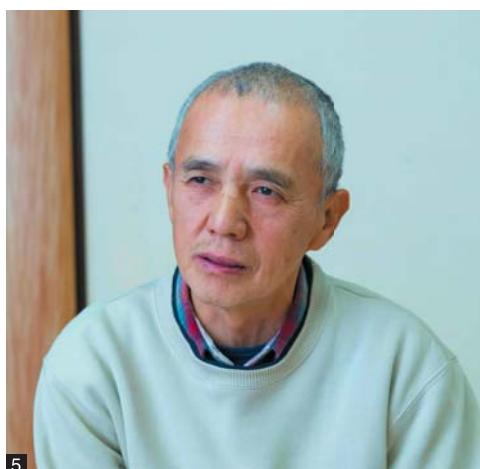
2



3



4



5